



夜には夢を見続けます

吉田群青

## 夢（2011年）

---

窓やふすまをすべて開け放してある実家の一階でわたしは探しものをしている。外はべったりと塗りこめたような闇。至るところに取り込んだままの洗濯ものがくちやくちやになってぶん投げがっている。うすく鼾の音が聞こえるが誰もいない。

二階への階段を上がる。上がり切ったところに、頭をこちら側にして、夫が目を開けたまま鼾をかいている。ハムスターのようなフェレットのようなほわほわの動物に青い布を巻いたものを握っている。

「なあにそれ。買ったの？」

と聞くと急に立ち上がって

「これはだめ」

と言いながらその動物を、そこらに置いてあった臙脂いろの座布団の下に隠してしまう。

(2011/5/18)

実家の台所で夫にチャーハンを作っている。冷蔵庫に一つだけあった卵を皿に割ってみると、黄身と一緒にピンク色の肉みたいなものが出てくる。

「早く使わないから雛になっちゃってるじゃない」

とそばに来た夫、びっくりもせずに言う。

「へえ、雛なの、これ」

と言いながらそれを手に取り子細に眺める。生々しい感じはあまりしない。茹でた鶏もも肉で作られたみたいな触りごち。あまり怖くないが、眺めているうちにとても残酷なことをしているような罪悪感がこみあげてくる。背負うように背中に黄身をくっつけている。まだ黄身から雛になり途中のようだ。

黄身をそっと取ってそれをチャーハンに使う。雛は液浸標本にしてとっておきたくなったので、夫に標本屋をタウンページで調べてくれるよう頼む。

祖母が

「お姉ちゃん、お姉ちゃん来てるのか、ちょっと来てくろ」

とわたしを呼んでいる。その声だけ聞こえる。

(2011/5/18)

スーパーの鮮魚コーナーで魚を見ていると、急に足元へ濁った水がひたひたと入ってきた。

鮮魚売り場で魚をさばいていたおじさんが

「津波だ！」

と叫ぶ。誰かが

「駐車場に俺の車とめてあっから乗れ！」

と言う。みんなそちらへ向かって駆けてゆく。わたしも泥水を跳ね散らかしながらそちらへ走る。

。

ゴーッと響いてくる地鳴りのような音。駐車場もやはり一面の泥水。くるぶしが浸かるぐらいの深さ。

横にいた女性が

「なんだ大したことない。大丈夫じゃん」

と言った次の瞬間、急に水かさが増し、膝ぐらいになった。

青い車の傍らに男性が立ってわたしを手招きしている。そちらへ向かいながら携帯電話を開き、実家へ電話。つながらない。

「もうだめだ！」

と言う声を聞く。聞いた直後、それを言ったのが自分であることに気づく。

(2011/5/11)

## 夢（2011年）

---

祭囃子の聞こえる神社で、わたしは白い日傘を差して歩いている。あたりはどこもかしこも陽光がたっぷりと降り注ぎ、紅白の薄い紙で作られた花があらゆるところに提げられたり貼り付けられたりして、全体的に正月のようなおめでたい雰囲気。その中をわたしは一人で目的もなくゆっくりと歩いている。

突き当りに絵馬を掛ける場所があったので見ていると、神主さんみたいな人に

「願い事を書いていきなさい」

とペンと絵馬を手渡された。悩んだ挙句、絵馬に

「震災前の日常が一刻も早く戻りますように」

と書いたら

「神様はそんな抽象的な願いは聞かない」

と言われてしまった。

(2011/5/9)

「りま」という名前の女兒（3歳だと言い張っているが10歳ぐらいの大きさ。見覚えがないがわたしの子供らしい）とテーブルを挟み向かい合って座っている。りまは画用紙を出してきて、

「ママの背後霊描いてあげる」

と血まみれの女の絵をクレヨンで描き、

「はい」

とわたしに手渡す。

場面は変わり、わたしは公園で誰かに絵を見せ、

「汚いものや残酷なものは見せないようにしているし霊のことなんて教えてもいないのに、こんな血まみれの女を描くなんて、やっぱり子供にはそういうのが見えるんだね、だから残酷なものは見せないようにしても無意味だね、もう惨殺された人の霊とか見えちゃってるんだから」

と興奮気味に早口でまくしたてている。

相手は黙ってしまいまで聞いてから、

「りまって変な名前だね」

とそれだけ言った。

(2011/5/8)

曲がりくねった黒い道を歩いていたらトンネルに差し掛かった。そのトンネルは真っ暗で先が全然見えないが、ほかの道は存在しない。仕方なく進んで行ったら壁がどんどん赤黒く、じとじと濡れ、なんだか肉のような質感になってきた。（これは人の体内だ）と思って立ち止まり、引き返そうと振り返ったら赤い服の女が無表情で追いかけてくるのが見えた。物も言わずに全速力で逃げた。

(2011/4/27)

自販機で缶コーヒーを買う。520円入れて買ったら、お釣りがぜんぶ1円玉で出てきた。取り出し口から際限なくあふれ出てくる1円玉を見て、わたしは途方に暮れている。手ぶらなので（袋やバッグなど入れるものを持っていないので）持って帰れないのだ。1円玉はまだ出続けている。永遠に出てくるように思える。

(2011/4/5)

屋根瓦の上で、わたしに対して平行に並んでいる沢山のピンクと白の蛇を、誰かに命令されて延々と垂直に並べなおしている。蛇はどれもこれも太くて長く、ぐなぐなするし、まっすぐにするだけでも大変だ。わたしは、（こんな作業して何になるんだ）という気持ちで泣きながらその作業を続けている。

(2011/4/4)

## 夢（2011年）

---

遊園地のような場所にいる。周囲には小学校や中学校、高校時代の同級生たち数人がいる。わたしは彼らと一緒に、何日間か旅行にきているらしい。そして、わたしだけ先に帰らなくてはならないということになっている。

今日はわたしが帰る日のようだ。さんざん遊び回って、笑い疲れた状態のわたしは、この場所（うすうす現実の場所ではないと感づいている）から帰りたくないと思っている。

「帰りたくないなあ」

と周囲の同級生たちに漏らすと、彼らは口々に「もう少しいればいい」「帰らなくたっていいんだよ」「ここにずっといたらいいじゃない」と言ってくる。

わたしはしばらく迷い、

「ありがとう。でも、何日いても帰らなきゃならないのは同じだし、長くいればいるほど帰るのがつらくなるから、やっぱり帰るね」

と言う。次の瞬間、わたし一人だけがミニSLみたいな機関車に乗っている。辺りは素晴らしい夜景。遠くで手を振っている同級生が見える。

(2011/3/31)

明るいドーム状の、生暖かいところに仰向けで寝ている。壁も天井も真っ白。暑くも寒くもなく、何の負荷もなく平和な気分。すると、急に何かの力で管の中（やはり白い）へ押し出されそうになった。

咄嗟にわたしは、（出たくない！）と、でっばったところに指をひっかけて抵抗したが、抵抗しきれず手を放してしまう。

そのまま細い管の中をにゅりんと通り、どこかへずぼんと抜けた。するとすぐに誰かがわたしを抱え、「おめでとうございます。男の子です」と言った。

「たつや」という名を付けられた。

(2011/3/10)

手術室のような場所に横たわったわたしは、見覚えのないひとに取り囲まれ、「覚えてる？」「記憶喪失なんだよ、あなた」「ここどこかわかる？」「ここがあなたの居場所なんだよ？」「帰れる？」「帰るの？」「2たす2は？」と、矢継ぎ早に質問をされている。早く答えなくっちゃ、と焦りながらもうまく口が回らず、あの、あの、と馬鹿のようにそればかり繰り返している。

(2011/3/6)

古民家の土間のようなところで、わたしは誰かと会話している。目の前の床に殻のむかれた茹で卵がひとつ転がっていて、白身に泥がついているのが見える。すごく美味しそうに見える。洗ってアジシオを振って食べたいと思うが、話を切り上げることができない。仕方なくそのまま会話を続けつつも拾わなきゃ拾わなきゃと思っている。

(2011/2/23)

大地震で、周囲の建造物が悉く崩壊し、最早そこへ居られなくなってしまった。

わたしは仲間（夢のなかだけの仲間）と一緒に古いアパートへ逃げ込む。どの部屋もドアの鍵は開いており、住人はひとりもいない。室内の壁紙は黄ばみ、床は埃まみれだ。取り壊される予定だったのかもしれない。とりあえず、ということで、古毛布を拾ってきたり新聞紙を拾ってきたりして（道路には実にいろんなものが落ちているのだ）避難生活を送るようになる。避難生活なのになぜかすごく楽しい。痛みも苦しみも何もない。それで（これは現実ではない）と気付いた。

次の瞬間、古アパートも仲間も消失し、わたしは実家の一階にぺろっと突っ立っている。室内がいやにがらんとして不安だ。「おとーさん、おかーさん」と呼びいながら歩きまわってみると、家のそこかしこに父や母や兄が倒れており、「あ、」と声が出た。

(2011/1/22)

急に巧く歩けなくなり、病院へ行く。待合室で時代劇の侍みたいな恰好をした男性に

「脛に携帯電話が入っている」

と言われ、そこを刀で斬られ、傷口に手を突っ込まれる。確かに血まみれの携帯電話が出てきた。（痛みを感じないが、もしかして神経も切られたのかな、このまま歩けなくなったらどうしよう、この侍みたいなひと、医者じゃなさそうだな、消毒はどこでしてもらえるんだろう）と、いろいろなことを思いながらも、とりあえず血でぬるぬるの携帯電話を受け取り、

「ありがとうございます」

と頭を下げた。

(2011/1/5)

## 夢（2010年）

---

網戸を開けていると、大量のごきぶりと大量の伊勢海老が外からすごい音を立てて押し寄せてきた。半狂乱になって新聞やスリッパで叩いて殺し続ける。

どこをどう叩いても必ず1匹は殺せるほど床も天井も壁も伊勢海老とごきぶりだらけ。伊勢海老はゆでられたように真っ赤だ。ごきぶりは掌ぐらいの大きさだ。時々、伊勢海老がものすごい力で指や足をハサミではさんでくる。そのたびに叫ぶ。

天井から何度も伊勢海老やごきぶりが落ちてきては頭や肩に着地する。絶えず振り落とす。

ミチミチキシキシとすごい音が充満している。鳴き声だろうか。ごきぶりが鳴くとは聞いたことがあるが伊勢海老も鳴くのだろうか。狂い回って殺し続けながら、頭の片隅でそんなことを考えている。

(2010/12/25)

特殊な方法を使わないと行けない「非現実」という地名の場所にいる。

「非現実」には、青緑とか紺とか灰色とか、現実にはありえないような変な色の、やけに大きくてかさかさした花が咲いている。わたしは、知人の男（夢の中だけの知り合い）と、

「ようやく来られたね、非現実」

「ここまで来るの大変だったな」

「どうやって来たっけ？」

「忘れた。というか、忘れるのが普通なんだよ、ここに来る方法って」

「そうなの？」

「なんだ知らなかったんだ。だから一生に一回しか来らんないの、ここには。どうやって来てどうやって帰ったかみんな忘れちゃうの。それが当たり前なの。だから非現実っていうの、ここ」

「へえ。なんか楽園の廃墟みたいな感じするね」

「うん、すげえ殺風景。他に生き物いねーのかな」

というような会話をしながら歩いていた。

わたしは、デジカメを手に持って、話の合間合間に花や空の写真を撮った。

そのうち、何故か仲たがいをしてしまったわたしと男は、罵り合いながら別々の方向へ歩き出す。直後、何か柔らかいものを踏んだ。足元を見てみると、地面には無数の、色んな形の帽子が落ちていた。

それを見て（あ、これはきっと前にここに来て、死んだひとたちの帽子だ。きつとここで一人になったら死ぬんだ）と直感的に理解したわたしは、知人を呼び戻そうとするが、既に彼は物凄く遠くまで行ってしまっているので、幾ら呼んでも声は届かない。

(2010/10/12)

あかるい場所で、とても自然な手つきで、たばこを吸っている。

（あー吸っちゃった。しょうがないか...ああ、みんなに笑われるだろな...何て言おうかな...めん



どくさいな...馬鹿にされるだろうな...いやだなあ...)

といろいろなことを目まぐるしく考えながらも当然のような顔つきでゆったりと煙を吐きだしている。

至福みたいな感情が胸のうちに込み上げてくる。

(2010/10/26) ※現実で禁煙を初めて1か月ほど経った頃

## 夢（2010年）

---

白いベッドに横たわっている。病院のようだ。ふと両足の間を見ると子供が産まれていた。だがそれはいやに平べったい。もう子供というより、子供のかたちをした少し厚めのフェルト生地みたいなのだ。よわよわしい声で泣いているのでかろうじて生きているとわかる。

ぼんやりと見ていると夫が出てきて、赤ん坊を（抱くというより手首のあたりににひっかけるような感じで）抱きとり、「だからあんなにコーヒーを飲むなと言ったんだ」と言う。全然うれしなくなさそうだ。わたしはほろほろ泣きながら、（産むんじゃなかった）と思っている。

（2010/9/15）

動物園から、パンダの親子がうちにやってきて、昼寝している（パンダというか、その動物は真っ白い虎のようなよくわからない形をしているが、夢の中ではパンダということになっていた）。それが畳の上で、折り重なって平和に眠っているのを見ながらわたしは（このことが動物園にばれたら怒られるんだろうなあ）と考えている。

次の瞬間、枯れ葉の降りしきる中で動物園の飼育員と向かい合って立っていた。飼育員は俯きながら竹ぼうきで、無限に落ちてくる枯葉を掃いている。

「パンダのことご存知ありませんか？」

俯いたまま、飼育員が尋ねてくる。

「知りませんが逃げてしまったのですか？」

「逃げるのは構わんです。しかしあれはかなり凶暴な獣でして」

飼育員が薄い笑みを浮かべながら背後の樹をゆびさす。その樹の幹には、わたしより大きい爪痕がぞっくりと刻まれていた。それを見て、（あのパンダはわたしを殺すつもりで来たのだ）と直感した。ゆっくりとした絶望が体にひろがる。

（2010/2/27）

知人（夢の中だけの知人）と、美味しいものを食べに行く。わたしは、むくむくのミンクのコートを着ている。相手は紺のジャンパーを着ている。

そのままレストランのようなところに入って着席すると、従業員がメニューを運んできて、「いまの季節なら鱈がおすすめです」と言ってくる。と、相手が急に、その鱈の産地はどこかと従業員に聞く。

「アイスランドです」

「アイスランドはダメだ。アイスランドの鱈は若い女性の性器や排泄物を食ってるじゃないか。アラスカの鱈を持ってきなさい」

「かしこまりました」

従業員がさがる。わたしは相手に、さっきの話は本当かと尋ねる。

「本当だよ。窓の外を見て御覧なさい」

指し示された方を見ると、そこには、水槽がふたつ並べられていて、どちらにも鱈（と思しき魚

) がぎっちり詰められている。片方は赤い色をしている。片方は灰色をしている。

「赤い方がアラスカの鱈だよ。水槽に注意書きが貼ってあるだろう」

確かに水槽の表には、注意書きが貼ってあった。読んでみると、こんなことが書いてあった。

【※アラスカの鱈...純粋なプランクトンや水草を食べる。腹を裂いても血は出ない】

【※アイスランドの鱈...女性の●●●●を好んで食べる。臭い】

●●●●というところ、読めないように塗りつぶされているが、女性の性器の名前が書いてあるらしい。なんだか気持悪くなって、「きもちわるい」と言うと、相手は笑った。

「お待たせしました」

従業員が鱈を運んでくる。しかしそれは鱈ではなくて鮭である。相手が「うん、いいだろう。これをボイルしなさい」と従業員に言う。わたしはなぜか急に腹が立ち（なんだ人を馬鹿にしている。なにがボイルだ、これは鱈じゃなくて鮭ではないか。偉そうにしやがって）などと思いつつ相手の顔を睨みつけていた。

(2010/2/27)

トイレにいる。下着をおろして洋式便座に座り、下腹に力を入れた瞬間、排泄物や血や粘液などと一緒に、黒紫色のぬるぬるしたものが出てきた。赤ん坊のようだ。

それを見たわたしはパニック状態に陥ってしまい、

「どうしよう！未熟児だ！この子はもっとおなかの中にいるはずの子だったんだ！！」

と叫びながら個室を出る。

するとそこに知人（夢の中だけの知人）が立っていて、わたしの背をさすりながら宥めてくれた。なんとか落ち着いたわたしは、その色の悪い赤ん坊を抱いて、火葬場へ向かう。

(2010/2/5)

## 夢（2009年）

---

アメリカの喫茶店みたいなところにいる。わたしは、呼ばれてそこへ行ったらしい。パイプ椅子に座っていると、女の人が二人出てきて、機械的に笑いながら別におもしろくもおかしくもない歌をうたった。

彼女らがうたい終わり、拍手をしていると三千円請求された。だけどわたしは、にこにこして財布から三千円出した。

（2009/11/9）

背広を着た田中角栄（ハマコーの顔をしていただけ、まわりの人達がみんな、角栄だ角栄だ、と言うので、田中角栄ということになっていた）が、道路に面した木造旅館の、二階の窓を開け放ち、そこから身を乗り出して演説しているのを見上げている。

角栄の演説は声は大きかったけど、群集の声の方が大きかったので、何か言っているのはわかるが何を言っているのかは聞き取れなかった。

道路は砂埃がたつような乾いた土で、みんな着物を着て歩いている。（大正時代みたいだ）と思う。

横に立っていた、パナマ帽を被った男性に、

「角栄はなんで演説をしているのですか」

と話しかけたら、

「角栄が演説しないと毒ガスが空から降ってくるから仕方なく演説しているようだ」

と答えてくれた。

田中角栄を見上げると、さっきまで背広だったのに今度は旅館の浴衣を着ていて、手には箸を持ち、更に箸の先にお醤油のついたまぐろの刺身を挟んだ恰好で、演説を続けている。いちど演説をやめて部屋に引っ込んで浴衣に着替えて食事をしているときに「もう一度演説してくれ」と頼まれたのかもしれない。

（2009/11/7）

知り合いの男性（独身。これは夢の中だけでの知り合いではなくて、現実でも知り合いの男性）が、結婚したと言って、日本髪を結った知らない女性（奥さんらしい）を連れてうちに来て、「青い座布団はありませんか。こいつ（奥さん）は青い座布団にすわらないと、子猫をたくさん生んでしまうから」

と言う。わたしは（なんだってそんな人と結婚したのかなあ）と思いながら青い座布団を探している。

押し入れを開けると、後ろに立っていたはずの奥さんがいつのまにか押し入れの中でこちら向きに正座して、にこにこしながら、

「気にしないでください。今ちょっとナントカカントカ（聞き取れず）を作っているところ  
です。」

と言う。

すると男性が、

「勝手なことばかりして。こいつ（奥さん）はいつもこうなんです。しかしほかの相手もないことだし、多少のことは我慢しないとイケない」

と不機嫌そうな顔をして言った。

わたしは、（もう座布団は探さなくていいのかなあ。この人たちは幸せじゃなさそうだけど大丈夫かなあ。奥さんに押入れから出てもらうにはどうすればいいだろう）等と思いながら、ぼんやりと立っていた。

（2009/11/7）

## 夢（2009年）

---

知らないおじさんと二人きりで、新宿行きのバスに乗っている。

おじさんはこげ茶色の上着（ブルゾンというのだろうか）を着て、ずっとうつむいたり、にやにや笑ったりして、一言も話さなかった。前方ではバスの運転手が体の横幅よりも大きいハンドルを持ってのんびりと回しながら、ずっと何か一人でぶつぶつ喋っていた。

バスがバス停に着き、「降りよう」と言いながら立ち上がると、おじさんは服はそのまま、夫に替わっていたので、手をつないでバスを降りた。季節は初夏のようだ。緑がまぶしかった。

「今日は新宿の博物館に来たよねえ」

と夫が確認するみたいに言ったので、

「そうだねえ」

と返事をした瞬間、眼前に近代的な白い壁の博物館が突如、と言った感じで現れたのでそのまま入った。

中は、廊下も天井もすべてが銀色で、天井からは黄色やピンクの巨大な脳の模型が幾つもぶら下がっている。展示物はほとんどなかったが、突き当りに赤いファイルばかりがぎっしりと詰まった巨大な本棚があった。

「あれなに」

と夫に訊くと、

「あれは日本の新聞ができてからいまままでに起きた、猟奇殺人事件の切り抜きがすべておさまったファイルだよ。君はそういうの好きだろう」

と言う。嫌いではないので一応見てみたけど、切り抜きは、白地にショッキングピンクで印刷してあるので、読みづらいことこの上ない。2つ3つ見て、すぐに閉じてしまった。

夫は、調べたいことがあるようで、色々な切り抜きを比較して、何か検討しているようだった。

「誰か殺したいの？」

と訊いたら、だまって頷いたあと、

「でも君じゃないよ」

と言って、うすく笑った。気付くと帰りのバスの中に居た。

「楽しかったねえ」

と言って横を見ると、夫がいない。わたしは最初から一人だったんだっけ、とぼんやり考えて、ポケットになんとか手を入れると、紙が指先に触れた。取り出してみると、先ほど夫が見ていた新聞の切り抜きだった。やはりショッキングピンクの文字で、人食い人種について書かれていた。

（2009/10/9）

なにか禍々しいような感じの女が立っている。見ていると、頭だけが意思を持っているように胴体から離れて飛び、地面に落ちた。頭蓋骨が砕け、広範囲にわたって脳が飛び散る。地面は真っ赤。

逃げようと後ずさりすると、その女の首のない胴体とぐしゃぐしゃの顔（もう顔とも呼べない。熟した果物が砕けたような赤いもの）が、じわじわ動いて追いかけてきた。

（2009/2/26）

## 夢（2008年）

---

わたしは学校の寮で暮らしているようだ。寮の隣には、食料品と、縄や刃物ばかり揃えてあるコンビニのような金物屋のような店があり、だけど生徒は、絶対にその店で買い物をしてはいけないという校則がある。

生活指導の教師（人間ではなく、グリズリーだった）が定期的にその店を見回りに来て、買い物をしている生徒がいたら捕まえてその場で喰ってしまう。だけどわたしはどうしても行ってみたいくて、こっそり寮を抜け出して店へ入ってみた。案の定すぐグリズリーに見つかってしまった。

（2008/12/22）

人の顔ぐらいあるごきぶりが、壁にいつびき、取り付いている。わたしは眠たくて眠たくて、眼を開いていることができない。誰かが「殺虫スプレーを持ってきて」と言う声が聞こえるのだけれど、ひたすらに眠たくて、なにも出来ずに眠ってしまう。

（2008/9/19）

冷え冷えとした灰色の大きな部屋に真っ黒な服を着た人がたくさんいる。みんな体育座りをしている。なぜだか知らないがその光景を見た途端、（ここにいる全員がわたしに殺意を持っているのだ）と気づき、恐ろしさにすくみ上ってしまう。

（2008/1/9）

わたしは何か本を出版したらしい。何百通もの批判メールがきている。そのメールは電子メールではなくて、普通の紙で、長く繋がって窓から入ってくる。送信者は毎回違う。知らない名前が知らない文字で書いてある（名前だけ。本文は普通の日本語）。読めない名前だけど、このメールを書いている人は、本を出したり書評を書いたりしている偉い人だということだけは何かわかる。しね、バカ、ヘタクソ、そればかりが何百回も書いてある。

性器から乳房の間にわたる程の、長い縦の切り傷を付けられて、わたしは病院に入っている。違う病室に夫がいて、何度か廊下ですれ違うが、わたしたちはまだ知り合っていないという設定のようで、一言も話さないし眼も合わせない。

看護師さんが体を拭きに来てくれる。患者服の前を開いて見ると、切り傷はいつの間にかすっかり乾いて、かさぶたになっている。

そのうち退院したが、また同じ場所を切られて、入院する。廊下を歩いているとまた夫に会った。どうやら脚が悪いようで、松葉杖をついている。夫はわたしに「またですか」と尋ねた。

「ええ、また来ました」

「誰にやられたんですか？おとうさんですか？」

そういわれてみればおとうさんにやられたような気がするが、よく分からない。着ている患者服はうすびんく色の浴衣で、わたしのにだけ帯がない。だから傷も乳房も性器もぜんぶ丸出した。



風が通ってすうすうする。

わたしはどこかのパン屋にいる。奥の方から店主らしき人が何か言っているのが聞こえる。

「なんでパンなんか焼かなきゃいけないんだろう。何の意味があるのか。先着順の特別なパンだ  
って店員が全部食っちゃうし、お客様に申し訳ない。おれはパン屋をやめたい」

声ばかり聞こえて、姿はみえない。パンをトレイにのせて、レジに行き、すいませーん、と声を  
かけても、店主らしき人の声が聞こえるばかりで誰もこない。そのうち、この声は録音であるこ  
とに気づく。店主らしき人はとっくに店をやめてどこかへ行ってしまったらしい。パンばかりが  
静かに並んでいる。

(2008年。上記を見た月日は不明)

## 夢（2007年）

---

真昼間、窓ガラス越しに、ピンク色のくらげやオレンジ色の烏賊が軒下に転がっているのを眺めながら、暗い家の中に座ってねじりドーナツを食べている。口中がいやにじやりじやりする。（粗悪な砂糖を使っているのだな）と思う。背後に巨大なラフレシアが、馬鹿な女が突っ立ってるみたいに咲いていた。

（2007/12/14）

真っ白な曇り空の下で真っ白な敷き蒲団を干している。すると急に激しく雪が降り始め、蒲団がわわわやと雪にまみれてしまった。わたしは呆然としながらも真っ白な空と布団と雪とを眺めながら（きれいだけど今夜、敷く布団をどうしようかな）と考えている。

（2007/12/3）

母と、実家の炬燵に入っている。お茶を淹れて飲みながら、ゆったりとしている。遠い親戚に子供が生まれた、と思い出したように母が言う。「片岡・ルリコ・リレハンメル」という名前らしい。それを聞いてわたしは、「ルリコ・リレハンメルが下の名前なの？ずいぶん言い辛そうな名前だなあ。試験のときに名前書くのも大変だね」と言った。

（2007/11/30）

実家のひんやりとした台所にべったりと仰向けで寝ていたら、母がわたしを覗きこみ、『あんたはもう娘じゃなくてお客さんでしょう。お客さんはそんなことしちゃダメなんだよ』と怒る。怒られたわたしは見放された気分になってしゅんとしてしまう。

（2007/11/16）

絵の上手い友達に頼んで、いろんな形の靴の絵ばかり百も二百も描いてもらう。「踵と爪先は殊更に丁寧に描いてね。そうじゃないと不安だから」なんてわたしは言った。

（2007/11/6）

お豆腐やてんぷらの並べられた食卓についている。食べようとする、皿の食べ物にことごとく蜘蛛が貼り付いていることに気づく。箸でつまんで取ろうとしたら這い上がってきて右手を噛まれた。熱いような痛痒いような感覚。

（2007/9/18）

コンクリートの地面の上にしゃがんで、大きな蜘蛛に無数の蟻の死骸を食べさせている。わたしはそれを無表情で眺めている。何の意味があるのかわからないがそうしなければならない気がして。

（2007/9/17）

ディズニーランドにいたら、空から麻薬が降ってきて周囲は狂乱状態、わたしは人にもみくちゃにされながら、（ああ、世間のひとたちがディズニーディズニー騒ぐのはこんな仕掛けがあったからなのか）と思っている。青い空に紙吹雪が舞っていた。お祭りの感じ。

（2007/5/7）

誰かと話している。話し相手は本当に直ぐ近く、睫毛と睫毛がくっつき合うぐらいの位置に居るので顔全体が見えない。相手はわたしの眼を見て話している。相手の眼の中になわたしが映っている。わたしは、（ああ、わたしたち、相手を見てるつもりが実は自分を見てるよ）と思いながら、相手の話を聞いていた。

（2007/1/29）

図書館で、借りる本をわくわくと選んでいる自分を至近距離で、横から眺めている。こんなにじっくり自分の横顔を見たのは初めてだなあ、鼻が低いなあ、と他人を見るように思っていた。

（2007/1/1）

## 定期的に見る夢と記憶に残る最も古い夢

---

わたしは子どもの姿で、翡翠色のかなり大きな川のそばにいる。そして、同じ年頃の子ども数人と駆け回ったり大声を上げたりして遊んでいる。河原は白い砂利。川と河原のほかは、家も木も藪も岩も、何もない。ただのっぺりとどこまでも平たい。

1人の子が、後ろを向いて数をかぞえ始めたのでこれからかくれんぼをするとわかる。みんな歓声をあげながら散り散りに走ってゆく。どこを見回しても隠れるところなんてないはずなのに、どうしたことか、みんなあっという間に見えなくなってしまう。鬼の子とわたしだけを残して消えてしまったみたいに。

鬼の子が「もういいかい」と怒鳴るのに「まあだだよー」と怒鳴り返し、隠れる場所を必死で探す。いくら探しても隠れられそうな場所なんてどこにも無い。仕方なく川の中へ飛び込む。思ったより川は深く、わたしはどんどん沈んでいく。水面を通して見える光が驚くほど速く、上へ上へ遠ざかってゆき、周囲はだんだん暗くなっていく。苦しい。死んでしまいそうだ。わたしは手も足も、動くところはすべてめちやくちやに動かして、浮き上がろうともがく。無数の泡がすごいスピードで上へあがってゆくのが見える。苦しい。

(定期的に繰り返し見る夢)

バルタン星人とロボット（青と銀と黄色で構成されていて、腕は掃除機のホースのよう。どことなく古びた感じがする。ライトセーバーのような光る棒を武器にしている）が戦っているのを、わたしも巨大になって体育座りで見ている。

戦いはすでに終盤である。バルタン星人が負けそうだ。ロボットが棒を水平に構える。

（あっ、ロボットがとどめに、あの光る棒をバルタン星人の口のなかへ入れようとしている）と思った瞬間、いつのまにかわたしがバルタン星人と入れ替わっていた。何が起きているのか把握できないままわたしは口のなか深くに棒を差し込まれてしまう。

棒は武器だと思ったら普通の蛍光灯だ。温い、埃っぽいような味がくちのなかに広がる。

（記憶に残っている最も古い夢。おそらく5歳頃）

夜には夢を見続けます

<http://p.booklog.jp/book/26426>

著者：吉田群青

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gunjoy/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26426>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26426>